

俺は姉貴に逆らえない

睦月 朔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人気アイドルバンドPastel*Palettesや女優として芸能界で活躍している白鷺千聖。そんな彼女を姉に持つ少年。彼はある日の出来事を境に姉である千聖には逆らう事が出来なくなってしまった。

この話はそんな白鷺姉弟と2人を取り巻く少女達の日常だったり、非日常だったり、エッチだったり、みたいな話にする予定です。

目次

| | | |
|---|-------|---|
| 0 | プロローグ | 1 |
| 1 | 千聖の弟 | 6 |

プロローグ

「このライブハウスね。入りましょう紗夜。」

「ええ。湊さん、気になっているバンドが出るんでしたっけ？」

ある日の事。ガールズバンド「Rose lia」のメンバーである湊^{みなと}友^ゆ希^き那^なと氷^ひ川^{かわ}紗^さ夜^よはあるライブハウスへと来ていた。

大通りから外れて裏道を少し歩いた場所にある古びた小さなライブハウス「バックストリート」

しかし、中へと足を踏み入れると外観からは想像出来ない程の熱気に満ちていた。鳴り響く熱いサウンドに観客の歓声が入り混じりライブは大いに盛り上がっていた。

「湊さんの目当てのバンドの出演は？」

「今、演奏しているバンドの次の筈よ。タイミングが良かったわね。」

周囲の音が大き過ぎて普通に会話しようものなら声が掻き消されてしまうため、2人は耳打ちのような形で会話をする。

ジャ~~~~~~~~ン!! ジャジャン!!

「ワアアアアアアアアアアアア!!」

ヒューー！ヒューー！

「E^{イー}v^ブi^ルl^ガy^イの皆さん!!ありがとうございます!!ございました!!皆さん!!もう一度盛大な拍手を!!!」

進行役のような男が観客に向かって拍手を要求する。

「終わったみたいですね。ところで、湊さんはそのバンドのどういったところが気に入っているのですか?」

「熱意よ。音楽に対する熱意。他のバンドからも感じられるのだけれど、このバンドは特にその熱意が他と比べ物にならないくらい伝わってくるの。音楽から。」

「熱意…ですか。湊さんがそこまで言うのなら相当なものなのでしょう。」

「ええ。だからそんな彼らの音楽を聴く事で私達R^ロo^ーs^ーe^ーl^ーi^ーaも良い刺激を受ける事が出来れば、更なる高みへと登ることが出来るんじゃないかと思ったの。…残念ながら他の3人は予定が合わなかったけれど。」

本来ならR^ロo^ーs^ーe^ーl^ーi^ーaのメンバー全員で来るつもりだったが、友希那と紗夜以外のメンバーは個々の用事で来ることが出来なかった。

「仕方ありません。全員で来るのはまたの機会に…あ、始まるみたいですよ。」

会話を続けていた友希那と紗夜はステージに向き直ると口を閉ざして演奏を聴くために集中する。

「さあ!! 続いて登場するは、今人気上昇中のこのバンド!! Acc^アcel^クbeat^{セル}sだ!!」
進行役の男がステージ中央に立って大袈裟な身振り手振りで次のバンドを迎え入れる。

「ワアアアアアアアアアアアア!!」

バンドメンバーがステージに入場するや否や歓声が沸き起こる。

紗夜はステージに立つメンバー達をまじまじと見つめていた。

「私達とあまり年齢は変わらない方達ですね?」

「ええ。全員高校生の筈よ。」

「そうなんですネ。…あら?」

「紗夜? どうかした?」

突然言葉を止めてステージを凝視する紗夜に友希那が不思議そうに問いかける。

「あのボーカルの人…何処かで…」

紗夜がそこまで言いかけた瞬間、近くにいた女子のグループの会話が2人の耳に入ってきた。

「ねえねえ! 知ってる!? このバンドのボーカルの男の子!! あの白鷺千聖の弟らしいよ!!」

「ウツソ!? マジ!?」

「あー言われてみれば確かに!!顔立ちとかそっくりかも!!」

その話を聞いた紗夜は納得したように「ああ」と呟いた。

紗夜は改めてステージ上の彼に目を向ける。顔立ちは本当にそっくり。白鷺千聖と比べて目が若干吊り気味だろうか。中性的な容姿の美少年といった感じだ。

「白鷺さんの弟さんだったんですね。」

「ええ。私も話には聞いていたわ。私は白鷺さんの事はよく知らないけれど…紗夜は同じ学校だったわよね?」

「はい。ですが、私も彼女とはあまり話した事は無いので。日菜からよく話は聞くのですが…」

ギューイイイイイイイイイン!!!

ギター担当の少年が音を鳴らすと、それまでざわついていた観客が静まり返り、一斉にステージに注目した。友希那と紗夜もそれに倣ってステージへと目を向ける。

演奏前の挨拶だろうか。白鷺千聖の弟は自身の前にマイクを構えて深く息を吸い込んだ。

「お前らッ!!今日は来てくれて!!センキュウウウウウウウウウウウ!!」

「ワアアアアアアアアアアアア!!」

「!?!」

それを聞いた瞬間、友希那と紗夜はズルリと体から力が抜けてよろめいてしまった。

「オレ達と一緒に熱くなつて行こうぜッ!!最後までヨロシクウウ!!」

「ワアアアアアアアアアアアアア!!」

高らかと右腕を天に掲げて彼は観客に呼びかけ、観客もそれに応えるように大歓声を浴びせる。

一方の友希那と紗夜はまだ力が抜けたままだった。

「…なんだか、白鷺さんのイメージと全然違つていて…驚きました。」

「え、ええ。私も驚いたわ。で、でも彼らの演奏は間違いないわ。聴かせて貰いましたよ。」

「そ、そうですね。」

「それじゃあ行くぜッ!!先ずは1曲目!!聴いてくれ!!」

いよいよ始まる彼らのステージ。視線を戻した友希那と紗夜は改めて演奏を聴くために集中するのだった。

01 千聖の弟

「最ッ高に熱い時間だったぜッ!!お前ら!!今日はありがとう!!また来てくれよなッ!!」

「イエエエエエエエエエエ!!」

Accelerateのライブは終始熱い盛り上がりを見せた。

メンバーが退場した後もしばらくは歓声が上がり続けていた。

「紗夜、どうだった?彼らの音楽は。」

「素晴らしい演奏でした。流石、湊さんが一目置くだけのことはありますね。彼らの熱意というのもしっかり感じました。」

「そう、良かったわ。私達Roseliaもまだまだ上を目指せるわ。頑張りましたよ。」

「ええ、そうですね。」

「さあ、観るものは観たから帰りましょうか。」

「湊さん、何か飲んで行きませんか?少し喉が渴いてしまいました。」

そう言うのと紗夜は片隅にあるバーカウンターを指差した。

すると友希那は怪訝そうな表情を浮かべて紗夜を見つめる。

「な、何ですか？ 湊さん…」

「…紗夜、お酒は駄目よ？」

「と、当然です！ 何を言いだすんですか!？」

「ふふ、冗談よ。」

「…やめてください。全く。」

少しムスツとした表情になった紗夜はフイツとそっぽを向いた。

そんな紗夜を見て友希那はフツと微笑む。

「さて、何を頼もうかしら？ 紗夜は何を飲むの？」

「私は…そうですね。アイスティーにします。」

「良いわね。私もそれにするわ。…アイスティーを2つお願い。」

友希那が注文してから間もなく、グラスに入ったアイスティーが2つカウンターに並べられた。カランカラン…とグラスと氷のぶつかる音が心地良く聞こえる。2人はそれぞれ手に取り一口飲む。

「美味しいですね。」

「ええ、すつきりしていて凄く飲みやすいわ。」

「湊さん、この後練習しようと思うのですが、良ければ付き合ってもらえませんか？」

「奇遇ね。私もそうしようと思っていたところよ。」

アイステイーを飲み終え、グラスをカウンターに置く。

そして2人が出口へと向かおうとしたその時だった。

「なあ、ひよつとして君達Roseliaじゃないか？」

突然、友希那と紗夜のところへ5人組の男達が押しかけて来た。

「……何ですか？あなた達は……」

いきなり現れた男達に身構える友希那と紗夜。しかし5人の男達はお構い無しに2人に近づき、まるで逃げ場を無くすように周囲を取り囲んだ。酒に酔っているのか、彼らの顔は紅く染まっており、手には酒瓶が握られていた。

「やつぱりRoseliaだ。会えて光栄だな。俺達はEvil—Guyってバンドだ。知ってるだろう？」

「……Evil—Guy？……ああ、私達がこのライブハウスに入った時、最初に演奏していたバンドね。」

「それで、私達に何か御用ですか？」

警戒心を剥き出しにする友希那と紗夜。だが、男達はそんな事は気にせずに尚もズイツと2人に囂り寄る。

「そんなに固くならないでよく。この後、俺達と一緒に遊びに行こうよ。退屈なんてさせないからさあ。」

ニヤニヤと邪な笑みを浮かべながら舐め回すような視線で友希那と紗夜の体をジロジロと見る男達。

：気持ち悪い。紗夜は不快感をあらわにしながら男達をキツと睨みつける。それは友希那も同じだったようで、正面に立つ男を真っ直ぐに見据えながら彼女は言った。
「悪いけど、お断りするわ。二度と私達に近づかないで。：紗夜、行きましょう。」

友希那はそう言い切ると紗夜の手を引いて強引に男達の間をすり抜けようとする。
しかし――

「おっと！逃がさないよう。良いじゃないか！俺達と楽しいことしようぜ？」

逃すまいとする男達に友希那と紗夜は肩を掴まれ壁に押し付けられてしまった。

「……くっ！」

「は、離してください……！」

2人を掴んでいる男達はニヤけた表情を崩さず、ズイツと彼女達に顔を近づける。紗夜は表情に恐怖の色が混ざりはじめるが、友希那は尚も男を睨みつける。

「大人しく一緒に来るなら今すぐにでも離してやるよ？へへへ」

ベロリと男がイヤらしく舌舐めずりをするとう友希那が口を開いた。

「……離して。あなた達には興味は無いわ。」

「……ああ？」

興味が無い。そう言われて頭にきたのか、男の顚顚にピキツと青筋が浮かぶ。今までヘラヘラしていた男がギロリと友希那を睨み返す。

「何だつて？オイ、よく聞こえなかった。もう一回言ってみろ？」

「そう、ならもう一度ハッキリ言うわ。」

すうつと友希那は静かに息を吸い込んだ。そして――

「あなた達のような輩に興味は微塵も無いと言ったの！私達を離れなさい！」

それほど大きな声ではなかったが、友希那は強く、ハッキリした口調で目の前の男に言葉をぶつけた。瞬間、男の眼球がビシツと血走る。

「このクソアマア!!調子に乗ってんじゃねえぞ!!」

男がブワツと右腕を振り上げる。そして、その勢いのまま友希那の顔面に向かって拳を突き出した。

「……!!」

「湊さんっ!!」

紗夜が友希那の身を案じ叫ぶ。友希那は殴られる事を覚悟してグツと目を瞑り、歯をくいしばる。

しかし、いつまで経っても痛みが友希那を襲う事は無かった。男が殴りかかろうとしてから数秒が経過した。拳はとつくに振り抜かれている頃だろう。だが、体のどこにも

痛みを感じない。

状況確認のため、友希那はそつと目を開ける。

するとすぐ目の前でピタリと止まっている男の拳。そして傍には「彼」が居た。男の拳が友希那の顔面に到達しようとした刹那、彼が男の腕を掴んで拳を止めていた。

「…何してんだ？ 獄門^{ごくもん}。」

「てめえ、白鷺…!!」

獄門と呼ばれた男はバンドグループ Evil Guy のボーカルでリーダーを務める男であった。

「……は音楽が好きな奴らが集まる場所だ。ナンパしに来る場所じゃねえぞ。ましてや客に暴力を振るおうとするとは…」

そう言うのと彼は掴んでいる獄門の腕に更にググツと力を込める。

「ぐ…うつ!? は、離しやがれ!!」

掴まれた腕に激痛が走った事に耐えられなくなった獄門はバツと腕を振り払って彼から距離を取った。

（…いつ…細い体の癖になんて力してやがる…!!）

痛みの走った右腕を抑えながら彼を睨みつける獄門。

「おい、獄門。酔っ払ってて気分が昂ぶってたのか、元からそんな奴だったのか知らねえ

が、女に手を上げるのは見過ごせねえな。これ以上やるなら俺が相手になるぞ。」

彼は友希那と紗夜を庇うように彼女達の前に立って獄門と対峙する。

「上等じゃねえか、白鷺……なら、先ずはテメエからボコしてやらあ!!」

獄門は拳をボキボキと鳴らして彼を威嚇する。

その時、Evil—Guyのメンバーが獄門の方へ駆け寄り耳打ちし始めた。

「獄門さん、あまり騒ぎを大きくするとマズイですよ……」

「ああ!」

そう言われた獄門はふと周囲を見渡す。まわりの観客達が皆こちらに注目している。中にはスマートフォンを向けて撮影をしている者もいた。

「クソ共が……!!」

獄門はギロツと彼の方へ向き直る。拳を握りしめ、今にも殴りかかりそうな雰囲気醸し出す。

だがその時、騒ぎを聞きつけたスタッフ数名が2人の間に割って入った。

「そこまでです!……これ以上事を荒立てるのであれば、警察に通報し、あなた達を出入り禁止とします!」

しばらく睨み合いが続いた後、観念したのか獄門は苛立たしげに拳を下ろした。

「……チイツ!!……行くぞ、てめえら。」

大きく舌打ちすると、獄門はバンドメンバーを引き連れてライブハウスから出て行った。

「…覚えてやがれよ、クソガキが…」

出て行く直前に獄門が密かに吐き捨てた台詞は誰の耳にも届く事は無かった。



獄門達が立ち去った後、友希那と紗夜は彼、白鷺千聖の弟と対面した。顔こそ千聖とそっくりだが、ロック系の服装にツーブロロックの髪型、耳にはピアスなど清楚なイメージの千聖と違ってワイルドで少し不良っぽい印象を受ける。

「大丈夫ですか？怪我とかは？」

心配そうに彼は友希那と紗夜に声をかける。

「私達は大丈夫よ。ありがとう、助かったわ。」

「ええ、大丈夫です。あなたが止めてくれなければ、湊さんが怪我をするところでした。ありがとうございます。」

「そうっすか、良かった。」

2人は助けてくれた事の礼を言う。彼女達が無事だった事に安堵したのか彼はフツと表情を緩めた。

「湊友希那さんに氷川紗夜さん…っすよね？」

「ええ、そうよ。私達を知っているのね。」

「はい、クオリティーの高いバンドが居るって噂で聞いたもので気になってたんです。Roseliaのライブを何度か観に行きましたけど、想像してた以上の実力で圧倒されました。あなた達の演奏に感化されて俺達AccelBeatsも活動に一層熱が入るようになりましたよ。更に上を目指そうぜ…って。」

「ふふ、なんだか今日私達がここへ来るに至った経緯と似たような話ですね。あなた達のライブ、いろいろ参考になりました。今後の活動に活かしたいと思います。」

「そうね。あなた達AccelBeatsの演奏は素晴らしかった。私達も今日のライブを観て得るものがあつたわ。これからもうやってお互い高め合って行けたら良いわね。」

Roseliaの2人から思いがけない称賛を受け、彼は照れ臭そうに右手人差し指で頬を掻いた。

「この上なく嬉しい言葉っすよ。ありがとうございます。…あ！そう言えば、初めましてなのに自己紹介してませんでした。すみません。」

そう言うとは彼はジャケットのポケットから取り出したケースから2枚の名刺を取り出した。

「改めまして。俺、Accel Beatsのボーカル担当の白鷺百輝也しらさぎとぎやつていいですよ。よろしく願います。」

そして先程取り出した名刺を一枚ずつ2人に差し出した。バンド名と名前だけが書かれた白くてシンプルな名刺。

それを友希那と紗夜は受け取る。

「百輝也……ね。覚えておくわ。」

「私も覚えました。白鷺君、今日はありがとうございました。」

2人は貰った名刺を持っているポーチの中へと仕舞った。

「それじゃあ、俺この後メンバーとミーティングがあるので、これで。良ければまた観に来てください。」

「ええ、今度はRoselia全員で観に来させて貰うわ。」

百輝也はペコリとお辞儀すると足早に去って行つた。

友希那と紗夜は少しの間、百輝也の去った方を見ていた。

「ステージの上とはまた違った印象でしたね。何というか、落ち着いていると言うか……彼、ライブ中は凄くハイテンションでしたから。てっきりそのような人だと思つてました。」

「パフォーマンスは大事なことよ。場を盛り上げるためにはね。……紗夜もやってみる？」

あのハイテンション。」

「な、何を言ってるんですか!? わ、私には出来ません…。」

「ふふ、冗談よ。」

「…やめてください。全く。」

「そうね、冗談はさておきC i R C L E へ向かいましょうか。」

「ええ、行きましょう。」

2人は練習時間はどれくらいにするか等の話をしながら出口へと向かって歩き出す。
その時――

「…あら? もしかして友希那ちゃんと紗夜ちゃん?」

突然後ろから声をかけられた2人は振り返る。そこに居たのは先程までここで話をしていた白鷺百輝也の姉、白鷺千聖であった。